

51. 力石



神社境内によく見られる、角を丸くした大小様々な石で、幕末から明治・大正期に若者が力比べの余興や、訓練の用具として用いられました。

また、占い神事にも利用され、若者が投げた石の向きで吉凶を判断したとも言われています。

山阪神社の境内にも約 75kg、120kg、150kg の 3 種類の力石が置かれていますが、現在は人が触れることもなく、不思議そうに眺める参詣者があるに過ぎません。

52. 天王寺地区区画整理記念碑

桑津墓地の南西角に、昭和 3 年（1928 年）から 30 年を掛けてこの辺りを区画整理する記念として、昭和 6 年（1931 年）に建立された記念碑があります。

碑文は当時の大阪市長・関一の揮毫です。

阪神大震災により、倒壊の恐れが生じたので、平成 8 年（1996 年）3 月に再建されました。



53. 東部市場

江戸時代大阪のまちの各地に分散していた魚市場や青物市場は、昭和の初めに、大阪市により福島区野田に統合され、中央卸売市場になりました。

戦後の市内人口の回復や、周辺都市、近隣府県の人口も伸び消費が激増し、取扱量が毎年増加の一途をたどるとともに輸送手段の大型化・高速化が急速に進み、市場施設が狭く、過密となりました。

その打開策として東住吉区今林に第二中央卸市場（東部市場）の建設が計画され、昭和 33 年（1958 年）11 月より着工し、昭和 39 年（1964 年）11 月 20 日に施設が完成し、11 月 25 日より業務が開始されました。

その後、取扱量の増加に伴い昭和 52 年（1977 年）12 月に施設の拡張を行い、加工食料品売場を移転し、引き続き昭和 53 年度（1978 年度）から仲卸売場棟の全面改築工事を実施し、昭和 56 年（1981 年）3 月に完成しました。

さらに平成 12 年（2000 年）3 月に流通の効率化を図るために、加工機能と配送機能を一体化した配送加工センターを新設しました。

しかし、開設当時からの施設の老朽化が著しく、機能的にも様々な課題が生じたことから、「効率的な物流の創出」と「食の安全・安心への対応」をコンセプトとして、平成 20 年（2008 年）10 月、再整備事業に着手し、平成 24 年（2012 年）4 月から一層機能的で使いやすい市場として生まれ変わりました。



- ・ 所在地 大阪市東住吉区今林 1 丁目 2 番 68 号
- ・ 現在の規模
 - 敷地面積 105,615 平方メートル
 - 延面積 167,945 平方メートル
- ・ 取扱品目
 - (1) 青果
 - 野菜、果実及びこれらの加工品、冷凍食品
 - (2) 水産物
 - 生鮮水産物及びその加工品、魚肉入加工品、冷凍食品
 - (3) 加工食料品
 - つけ物、みそ、乾物及びこれに準ずる加工品、魚肉入加工品、冷凍食品
- ・ 平成 23 年度（2011 年度） 種類別取扱高
 - 数量 265,197 トン 金額約 97,166 千円

（大阪市中央卸売市場ホームページ：<http://www.city.osaka.lg.jp/shijo/index.html>）



54. 長居公園



長居公園(昭和 43 年 (1968 年) 1 月撮影)

戦後当初は、競馬場（大阪競馬場）と競輪場（大阪中央競輪場）が設置されていたが、競馬は昭和 34 年（1959 年）、競輪も昭和 37 年（1962 年）に廃止されました。

昭和 34 年（1959 年）から本格的な都市公園として整備され、球技場・競技場では平成 9 年（1997 年）国民体育大会（なみはや国体）、平成 19 年（2007 年）世界陸上が開催され、J リーグ・セレッソ大阪がホームスタジアムとして使用しています。

公園内ではウォーキングやランニングする姿が多く見られ、長居ユースホステルには世界中から宿泊に訪れています。

自然史博物館・植物園などには珍しい展示物や植物が数多くあり、見学の人でにぎわっています。

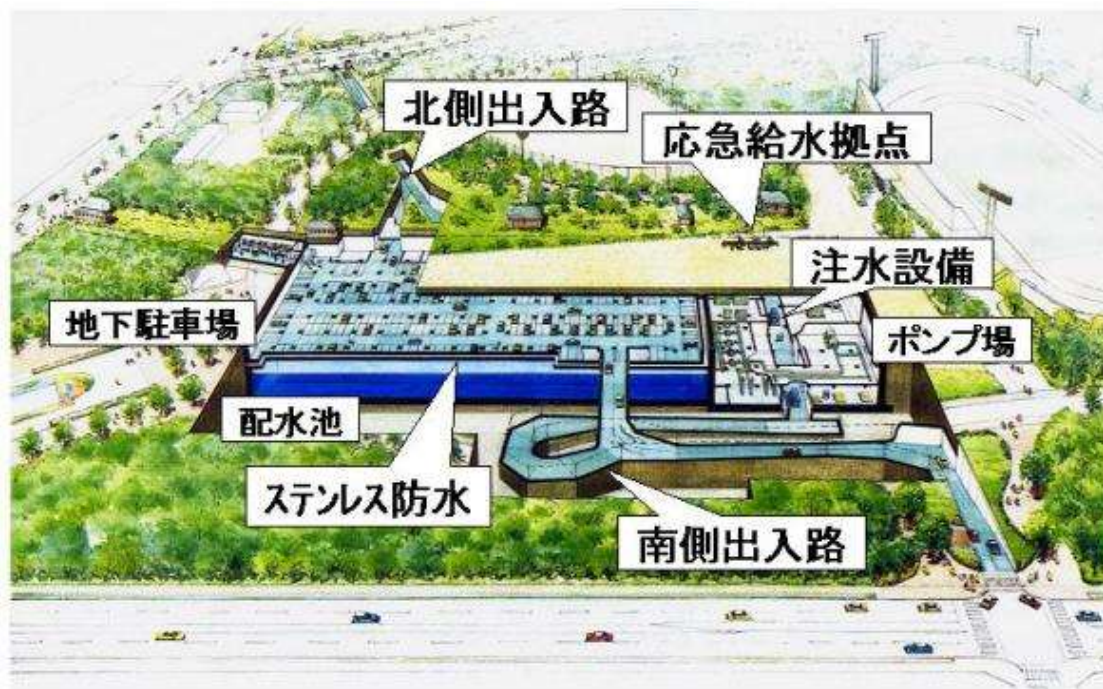
55. 長居配水場

平成 16 年（2004 年）9 月 14 日供用開始。

この「長居配水場」は、阪神・淡路大震災を教訓として、市内においてバランスのとれた給・配水拠点の整備を図ることを目的に建設されたものです。

この配水場により、東住吉区、平野区、住吉区、阿倍野区にまたがる市南部地域において、平常時の配水管の水圧が向上するほか、震災等緊急時の配水拠点として、給水の安定性が向上します。

また、大規模な災害時には応急給水の運搬基地として機能することにより、周辺地域における迅速な応急給水体制の確立が可能となるなど、広域避難場所である長居公園の防災拠点機能を大幅に向上させることができます。



56. 中井神社

中井神社は、三代実録（延喜元年（901 年））という書物に摂津の国「田辺東神（ひがしかみ）」と記されており、古くは、ご祭神にちなんで「牛頭天王社（ごずてんのうしゃ）」とよばれていました。その昔、社前に、清水の湧く井戸があり、人々は、「汚れ（けがれ）のない霊水」としてたいせつにしていたので、中野村の井戸の有るところのお社として、明治時代の初めに中井神社と改められました。（中井神社発行の神社暦による）中井神社の東神に対し西神が山阪神社（No. 83）といわれています。

境内に、根元 5m ほど残った榎（えのき）は、世に異変のあるときは必ず夜間にごう音がすると言い伝えられていました。現在、社殿の右前に白龍社のご神木として祀られています。

また大阪市の保存樹林に指定された、大楠、公孫樹（いちょう）、メタセコイヤ、小賀玉木（おがたまのき）があります。

元旦未明には（午前 0 時の合図とともに）初詣の参詣者に、干支いりの「かわらけ」で、お神酒が授与されます。毎年除夜の鐘が鳴り出すと長い初詣の行列ができます。

又、古くから安産の神として、有名であって、妊婦が、神前の、鈴の緒を頂いて、腹帯にすると、安産が出来ると言い伝えがあります。

毎年、夏祭り神事は 7 月 12 日・13 日に行われますが、その直前の日曜日に行われる神輿巡行の際に、小中学生などが、掛け声とともに整然とたたく枕太鼓は 50 年以上にわたり受け継がれてきた伝統行事で、一見に値すると思われれます。また神輿巡行は、猿田彦命（さるたひこのみこと）の装束で、（北ブロック、南ブロック各年交互に）行列を先導します。

笑福亭松喬一門会の落語会が、昭和 56 年（1981 年）から約 30 年間開催されていました。



57. 中臣須牟地神社

矢田住道（すんじ）の地域にあるひっそりとした神社ですが、延喜式の格式ある神社です。祭神は中臣須牟地神とともに住吉大神（表筒男命・中筒男命・底筒男命・息長帯比売命）を祀り、中臣氏と住吉大社とのゆかりを感じさせます。「須牟地（すむち）」の名がつく神社は他に「神須牟地」、「須牟地曾祢」があり、今は遷座していますが元はそれぞれ磯齒津道（しはつみち）沿いにあったといわれています。

磯齒津道というのは倭の五王の時代（古墳時代）にあった住吉津（すみのえのつ）から喜連に通じる道で新羅など外国からの使節が飛鳥に向かう道でした。「須牟地」には 磯齒津道の道の神であり使節の休息所といった意味があったようです。中臣須牟地神社も当時は現在地より北方の磯齒津道沿いに天神山という小高い丘の麓（現在の矢田北小学校あたり）にあり、外国の使節が来ると摂津、河内、大和から集めた稲で御神酒を醸し使節を歓待しました。その接待役が中臣氏でした。中臣氏はこの地域とつながりが深く、子孫の藤原不比等が、現在「住道（須牟地）廃寺跡」となっている寺を建立したといわれています。

古代から鎌倉時代まで天皇即位後の大嘗祭（だいじょうさい）の翌年、難波津で八十島祭（やそしままつり）という儀式が行われており、中臣須牟地神社はそれにも関わった由緒ある神社と伝わります。

のちに天神山麓にあった中臣須牟地神社の地域が河内国丹比郡（たじひぐん）に編入されたため、摂津の地域に中臣須牟地神社の祭神の一座、中筒男命（なかつつのおのみこと）を勧請して出来たのが湯里住吉神社といわれています。

（参考文献：東住吉区史、東成郡誌、大阪府の地名）



58. 中野のはり



現在も駅名が継続され、地名となって残っています。

当時では珍しく遠くから見えた3階建ての塔屋敷は、老朽化したために昭和50年（1975年）に取り壊されました。

中野鍼灸院（なかのしんきゅういん）は平安時代の延暦（782年～805年）の頃に設立された、「中野降天鍼療院（ナカノアマクダルハリヤ）」がその屋号です。

平安時代から一子相伝を守り、男児が恵まれない時は、女性も当主としての鍼灸術を習得して、現在に至っています。

43代目中野一氏の言によれば、以下のような長期にわたる経歴がわかります。

初代の治平氏は延暦20年（801年）生まれ、平安初期に弘法大師が布教の途上、当家に宿を借りたお礼として、当時最も進歩した鍼術とつぼを示す「遂穴偶像」（スイケツグウゾウ）（大人と小人の丈1m弱の木像）と金針を授与されとのことです。

その木像は現在も中野家に伝えられています。

3代目主禮氏は年度が不明ですが、旧暦満月の8月15日に開業されたので、「月見の鍼（はり）」と呼ばれ、今もその治療に訪れる人が多いといわれています。

南北朝の頃に、足利軍の戦火により屋敷を焼失したが、大師伝授の木像2体と鍼と漢方薬書が残り、今日に至っているとのことです。

宝暦13年（1763年）発行の摂津平野大絵図にも、中野村小児鍼師と記されています。

明治の頃、第41代目新吉氏は医師の資格を取得された上で、西洋医学を取り入れて独自の鍼法を築かれたので、近畿一円から「中野鍼まいり」として、一日500人以上の人々が殺到し、屋敷内に遠路の来館者を泊める宿舎も建てられていました。

大正3年（1914年）に南海平野線（No. 61）が開通した時には、中野駅から鍼院まで7ヶ所の道辻に石の道標が建てられました。

大正時代に中野家41代目が大阪鉄道（現近鉄南大阪線）（No. 25）の開通に尽力し、そのお礼として大正12年（1923年）の開通時には最寄りの駅名を「針中野」としたといわれています。

59. なにわ大放水路

市勢の発展に伴ってこれまで雨水を保水してくれた、田畑や池沼が少なくなり、集中降雨の際には下水道の整備された地域であっても、低地ではその処理能力を超えるに雨水が一举に集中し、洪水被害が発生していました。

こうした都市型浸水は大阪市の東南部において特に深刻であり、その抜本的対策として「なにわ大放水路」の建設が行われました。工事は昭和 59 年(1984 年)に着手され、平成 12 年(2000 年)に完成の 16 年にわたる大工事で、別図に示す大規模なものでした。

総延長 12.2 キロメートル、最大仕上り内径 6.5 メートルの大下水道幹線で、地下約 30m に建設されています。一方、この幹線に集めた雨水を住吉川に排除するポンプ場である住之江抽水所の計画排水能力は毎秒 73 立米であり、大阪市最大の抽水所であります。

・ 住之江抽水所の概要

なにわ大放水路によって集められた雨水を住吉川に排除する施設で、雨水排水のため口径 2.2 メートルの主ポンプを 6 台設置し、流入する幹線が地下約 30 メートルと深いために、施設の大部分が地下構造物となっています。

このような構造物を早くて、安く、しかも安全に施工するために、地下部分は円筒形(外径 81 メートル)の施設になっています。

流入してくる雨水には、砂などが混じっているのを、ポンプ室の後に配置されている沈砂池で雨水をゆっくり流して砂を沈め取り除きます。

また、建物の屋上に降った雨水を利用した「せせらぎ」や、施設の上部を有効利用した「多目的グラウンド」を設けるなど、広く市民が憩い親しめるような施設になるように配慮されています。



大阪市建設局ホームページから引用



平成元年(1989年)なにわ大放水路見学会 1



なにわ大放水路見学会 2

60. 鳴戸川



大阪府の河内平野西部・上町台地寄りを流れる、今川（No. 6）に注ぐ小支流です。

以前は、東住吉区内では中野 2 丁目の方から西流し、中野 1 丁目からは今川沿いに北上していました。

現在は中野 1 丁目では今川から分流し、今川に平行して北上し、東住吉区今川 1 丁目のうるし堤公園（No. 14）の北で、今川右岸に注いでいます。

古い地図には、うるし堤を過ぎてもなお今川沿いに北上し、杭全で駒川（No. 37）と同時に平野川に注ぐように描かれているものもありますが、現在は、そういった流れはありません。

育和橋近く川の東側にお住まいの、昭和元年（1926 年）生まれの方に聞くと、「鳴戸川と、今川に架かる二つの橋を渡っていた」という証言があり、鳴戸川は、今よりもずっと北の方で今川と合流していたことがわかります。

今川小学校の南側の、今川 2 号橋辺りへ東から T 字形に注ぐ川があったようです。

これは、鳴戸川改修の折、暗渠になったものと思われます。現在、其の場所に、鳴戸川へ注ぐ排水口らしきものが設けられています。今川は、曲がりくねった、天然の川ですが、鳴戸川は、人工的な直線状の、灌漑用、治水用の川でした。

戦後、東住吉区は住宅地として著しく発展し、昭和 24 年（1949 年）から駒川・今川・鳴戸川・平野川を改修するとともに、合わせて下水工事が行われました。

昭和 29 年（1954 年）に今川の改修工事が完成し、続いて施工された鳴戸川の改修工事の完成（昭和 36 年（1961 年））を記念して、今川福祉会館の前に石碑が建てられました。